

COOP トリプルカード みやぎスマイル基金 助成活動報告書

団体・学校名	宮城大学 事業構想学群 地域資源マネジメント研究室
連絡先	(電話) 022-377-8205 (代表) (ホームページ) 研究室 HP: https://linkingdesign.jp/

1. 助成事業報告

事業名	「地域資源ジェラートづくりを題材にした、地域資源活用ストーリーブック(てざわり)の作成」
目的	近年、地域発の商品開発が盛んになり、SNSの発達によって情報発信の手段が増えたことで地域の魅力を全国に向けて発信する機会が増えている。一方で、日々膨大な量の情報に触れる消費者に、地域の魅力に「共感」を乗せて伝える機会の創出は難しい。そこで、今回は地域の食材、生産現場、リアルな生活の様子を発信することで情報の差別化できないかと宮城県の柴田町を対象として「地域資源ストーリーブック」の作成に取り組んだ。
実施内容	研究室メンバーで取り組んだ「地域資源ジェラート」の製造を題材に、あらためてステークホルダー（自治体、一次加工業者や販売元、ジェラート店）を訪問し、ヒアリングを行い、それぞれの協力団体が地域資源を活用した商品開発で大事にしていることは何かの分析を試みた。そこで注目したのが、一次加工業者である柴田町・ばばの郷の副代表の女性のライフストーリーであり、そこを始点として柴田町や地域の暮らしの魅力を発信するためインタビューを行い、記事の作成やデザイナーの協力を得ながら、冊子作成を行い、モデル図を考えながらストーリーブックを完成させた。
開始から終了までの流れ	<p>【全体の流れ】</p> <p>まず、宮城県柴田町で作成した「ゆずジェラート」を題材に、ミニイベント（試食会）の開催を行った。そのうえで、生産現場などの現地視察を行い、地域との関係性の構築を図った。そのなかで、生産者さん個人のライフストーリーが面白いと感じ、冊子企画の構想を行った。加えて、各ステークホルダーへのヒアリングを実施し、その結果を元に、大事にしていることの可視化について、概念図化することを試みた。同時に、ヒアリング・インタビューを行った情報を、文字おこし、記事編集、デザイナーの協力を得ながらミーティングを繰り返し、最終的には冊子として活動の成果を取りまとめた。</p> <p>【気づき】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・団体ごとに重要視していることが異なるからこそ、発信していきたい地域の魅力を見える化することが協力体制を築いていく上でも重要であるという結論になった。

	<p>・ステーキホルダーへのヒアリング 原材料に近い立場にある一次加工業者様は、安心安全な食を届けることを重要視して商品開発に取り組んでいることが分かった。行政は、地域の加工業者の支援や外部の民間団体などといかに協力体制を築いていくかを重要視していた。販売元は、地域百貨店のとして地域に埋もれた魅力ある商品を全国に売り出すことで、生産者や地域に貢献したいようだった。ジェラート店は、美味しいものを作り、更にそこに地域ならではのストーリーや付加価値をいかに載せることを意識していることが分かった。</p> <p>・冊子の作成 インタビュー内容から文字おこし、記事編集、デザインという一連の過程を経て、冊子が出来ることを実感した。加えて、ステーキホルダー分析の結果を概念図にまとめた。こだわった点は、地域のあたたかみが伝わるような色使いと実際にページをめくりながら地域のぬくもり、リアルさ感じて欲しいという願いから「てざわり」というタイトルをつけた点である。</p>
活動の成果と教訓	<p>・成果 出来上がった冊子を、地域の生産加工所であるばばの郷に届けたところ、喜んでくださり「りっぱな冊子作ってもらったからラミネートして飾るから〜。」「みんなで大笑いしながら、読ませてもらいました」などのお声を頂き、達成感を感じた。言語化は難しいですが、活動を通して、地域の皆さんとじっくりと関わることが生涯の財産となった気がしています。</p> <p>・教訓 今回は個人的な内容をインタビューするため、事前準備として、ばばの郷の副代表とインタビューである研究室メンバーとの信頼関係を構築する必要があると考えた。具体的には、生産現場の見学や現地でのイベント参加など計9回ほど訪問した。また、直接訪問出来ない場合も手紙でコミュニケーションを取るようにした。その結果、心理的な安全性を確保した上でインタビューすることが出来た。地域のリアルな生活の様子を伝えるには、最初の協力体制の構築が最も重要であることが、振り返ると教訓といえると思う。</p>
今後の展望など	<p>今回の経験から冊子、記事を制作するプロセス、地域で商品開発が行われる過程の概念図化にも取り組むことができ、関係者との協力体制についても経験を積むことができた。今後は、個人的には、今回の経験をもとに石巻市での活動に活かしていきたいと思う。また研究室メンバーとの振り返りでは、学生プロジェクトとして、地域と触れ合える機会をさらにつくっていききたいということが話題にあがった。</p>

2. 助成金使途報告書

(1) 収入の部（助成の対象となった事業の分のみ）

確保した資金内容	金額（円）	備考
みやぎスマイル基金	300,000 円	

合計		300,000 円

(2) 支出の部 (助成の対象となった事業の分のみ)

費目	内容	予算額	実支出額	助成金からの支出額	領収書 No.
交通費	車での移動	40,000	11,344	11,344	No.1,2
	先進地視察費	72,000	0	0	
委託費	冊子デザイン費 ・印刷 (500 部) ・ページデザイン作成 (8 ページ) ・ホームページ用デザイン作成 ・図表作成補助 ・写真撮影指導 ・冊子作成に関するワークショップ (3 回) を含む	110,000	288,000	288,000	No.5
	講師謝金	48,000	0	0	
	ポスター資料作成	30,000	0	0	
雑費	タックシール	0	400	400	No.3
	ボールペン	0	256	256	No.4
合計		300,000	300,000	300,000	

*用紙が足りない場合は他の用紙などで補ってください。

*収入の合計と支出の合計が一致していることをご確認ください。

地域資源ストーリーブック

てざわり

柴田町

地域の魅力を伝えるには…?

ステーキホルダーインタビュー

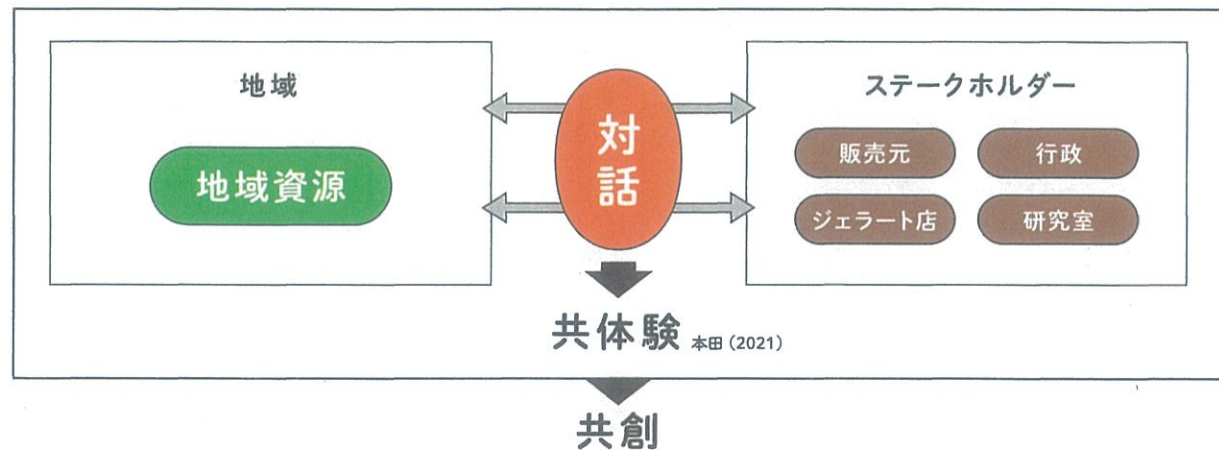
宮城県柴田町 素朴なおばあちゃんの味と暮らしの郷



このページでは、「柴田町入間田地区・柚子のジェラート」の製作にあたって、柴田町、ばばの郷、ジェラート店や販売元とどのように協力体制を気づいたのか、イメージ図と一緒にご紹介します。特に、地域が発信したい魅力とステークホルダーとの丁寧な対話の道のりを説明します。

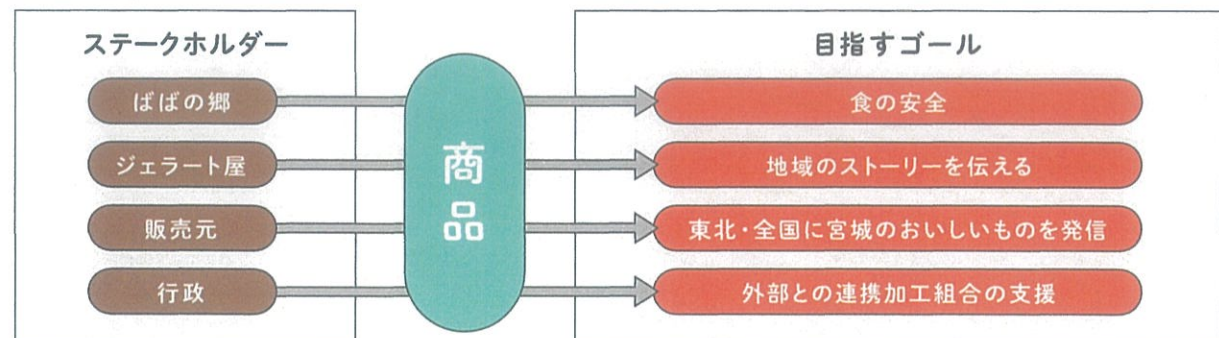
【①『共創』が生まれるまで】

地域で商品開発を行うとき、各々のステークホルダーと地域がどのように関わりしるを自ら見つけて、共創が起こるのかを表しています。ポイントとなるのは、『対話』です。具体的には、地域のどんな情報・魅力を伝えたいかを時間をかけて細やかに、地域内、ステークホルダー間、更には地域と各ステークホルダー間で根気強く行うことです。



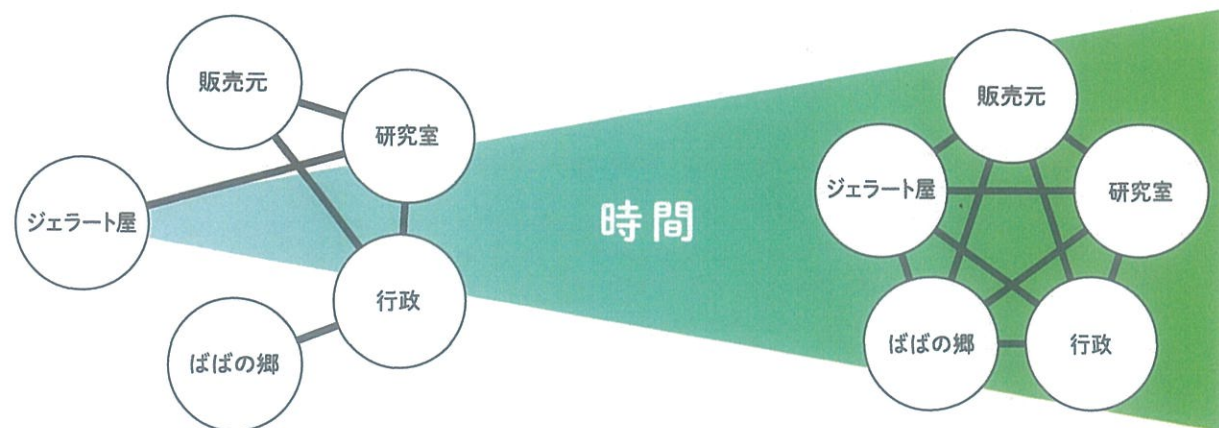
【②ステークホルダーがそれぞれ目指すゴール】

一見すると、それぞれ目指すゴールが違います。それでも、なぜ同じ方向を向いて商品開発に取り組めるのか？それは①で説明した、対話から発信していきたい『価値』を共有しているからだと思われます。



【③協力体制の移り変わり】

①の『共創』を生み出すには、丁寧な『対話』をベースとした信頼関係がカギとなります。対話によって形成された心理的安全性が、さらにざっくばらんな対話を可能にする雰囲気を生み出し続け、結びつきを強めていきます。



[1] 各々の協力関係が構築される

[2] 協力関係者全体で
バランスの良い協力関係ができる

協力体制の移り変わり

[1]から[2]にかけて、各団体間と全体での心理的安全性（信頼関係）が構築できるとスムーズな商品開発になる

地域の魅力を伝えるには…？

近年、「その土地ならではの」食材を使って商品開発が各地で盛んに行われています。未利用資源や、全国的な知名度はまだないけれど地域で愛される食材を活用するなど、実に多くのユニークな商品が存在します。

加えて、ここ数年のネットショッピングの利用率増加が追い風となり、今ではスマホ一つで各地域の商品が購入できるため、消費の増加も期待されます。

一方で、ネットショッピングが盛んな時代だからこそその課題もあります。大量の商品がネット上にあることで「その土地ならではの」の特徴で差別化を図った商品ですら価格競争の熾烈な争いに巻き込まれること、そもそもインターネット上で日々大量の広告や情報を得ている消費者の意識に少しでも刺さるような工夫をするのですら難しい時代になっています。

せっかく、こだわって作った商品の魅力が受け手に届かないのではもったいない。そこで、今回は地域の「てざわり」をコンセプトに、暮らしや食文化に着目した物語を商品に付随して、もっと消費者の方に共感して、興味を持ってもらえるよう、冊子という形で地域の魅力を付加価値としてお届けすることにチャレンジしました。

具体的には、「柴田町入間田地区・柚子のジェラート」について、現地のお母さん達とのお話から、地域の語り口を探ってみました。



2021年に企画し、2022年に仙台市の百貨店・藤崎のお中元として販売された「MIYAGI gerato」。左上が、柴田の柚子ジェラート。

ステークホルダーインタビューから抜粋した意見

【原料加工業者】 荒井けさ子さん
柴田町入間田地区 入間田農産加工組合「ばばの郷」副組合長



元々は、地区に住む50名ほどのおじいちゃんおばあちゃんにボランティアでお弁当を提供していたことから、口コミで評価が広まってお弁当の仕出しや柚子の手作りペーストを作るようになったんだよ。
ものづくりで、一番大事にしているのは「信頼」だよ。作る人と食べる人の信頼もだけど、作る人同士の信頼も大事にしているよ。

【自治体】 熊谷英樹さん
柴田町 まちづくり政策課 課長補佐 (企画班長)



国の地方創生事業から「ばばの郷」さんは始まりました。翌年には「ばばの郷」さん含め、それぞれに活動していた柴田町の直売所や農村レストランが一体となって何かできないかということで、「里山ビジネス振興協議会」が立ち上がったんですよ。
商品としては他の地域にないものを作りたいなって。どうしても公務員的な視点になりがちなので、その為には今回のように外部から学生さんが入ったり、民間の事業者さんと協力して開発できると町としてはありがたいですね。あとは、長期的に売れるような商品づくりを通して地域が活性化してくれると。

【ジェラート製造業者】 沼田夏奈さん
株式会社GM7 ラフェスタ事業部サブマネージャー



私達GM7は東日本大震災を契機に、地域の魅力を最大限に引き出そうと始まった、丸森町にある地域商社です。
正直、新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響や台風の被害などで事業が苦しい時もありました。そんな時だからこそ、純粋に美味しいものを届け、食べてもらう人、作る人が嬉しい気持ちになるよう、そして丸森の人には丸森の会社なんだよと誇ってもらえるような存在でありたいです。
美味しいものを作ろうというのが一番大事です。その上で、ストーリーを伝えるのが大事だと思っています。地域のものの魅力を最大限に引き出し、ストーリーを付けて、ソコにこんな魅力があるんだよって伝えることが私達の存在意義っていう部分だと思います。

【マーケティング・販売】 大江田識名さん
株式会社 藤崎 マーケティング統括部 オムニチャネル推進 (ギフト) ご担当



会社としては「地域発展主義」という経営理念を基に、地域全体で活性化していけるかどうかというのを商品開発で大事にしています。また、地域の中で眠っている優れた商品を見つけ出して、様々な方と協力しながら商品販売までとどろくことは大変ですが、とてもやりがいがあります。
今回は、百貨店としての役割や強みなどを活かして、学生さんと一緒に商品開発する過程で意見を頂いて参考にしたり、逆にこちら側がビジネス的な視点でターゲット層や価格設定などに関して学生さんにアドバイスできたというのが互いの勉強になりとてもよかったのではないかと思います。

宮城県柴田町 素朴なおばあちゃんの味と ばばの郷

仙台より南に位置する「花のまち」柴田町。東北有数の桜の名所として、春には千二百本を超える桜が見られるほか、夏には船岡城址公園にてあじさい祭りを開催するなど四季折々の美しい植物たちが魅力のまちです。
今回、お邪魔したのはまちの中心部から更に、車で10分。

山間部にある入間田地区いりまたちくにある柚子加工生産組合「ばばの郷」。

周辺の山々に囲まれた、こぢんまりとした調理場からは、いつもにぎやかな約7名のお母さん達の声が聞こえてきます。お家の近くで採れた竹の子やふきを使ったお弁当は口コミで大人気。

そんな「ばばの郷」の副組合長を務める荒井けさ子さん(67)に、柴田での暮らしや、ばばの郷でのお弁当づくりなどについて伺ってきました。

ばばの郷
荒井けさ子です。



取材・文 池田綾花



ばばの郷では、メンバーのお母さん達がオリジナルお弁当の仕出しから、柚子商品作りなどをしています。そんなお母さん達のリーダーでもある荒井さんは、実はお隣の岩沼出身。どうして、柴田ではばばの郷に関わるようになったのでしょうか。

柴田の隣にある岩沼で生まれて、あとは、ザッと岩沼。実家は農家だったのと、りんごの生産が盛んな場所だったから、小さいころは両親と一緒にりんごの採りがだをしてたんだ。あとは、地域のイベントでりんご売ったりもしてだね。だから、今ばばの郷でやることがどう変わるんだね。そういうごど、好きなんだね。

—柴田町に来るきっかけは？
—年上の旦那さんと再婚して。私が大体四十歳ぐらいで、柴田に移住してきたんだ。自分の子供もいたから再婚すんの悩んだけど、でもまあ、柴田に来て良かったね。今は幸せだよ。なんでかつつと、ばばの郷のお母さん達とほら、みんなでお茶したり、ボケねえようにね(笑)

—柴田での生活にはすぐ慣れました？
—うん、慣れたね。でもやっぱり、地域の人に一番先に慣れないかと思って。うちの人が、大工やりながら農村改善センターの代行員だったり、契約講師だったり。家に、寄り合いでみんな飲み食いしに来たが。みんな来るでんぶで。味も出し、見だ目も綺麗に。桜の時期の弁当は苦労したね。

—お母さん達で全部メニューは考えたんですか？
—うん、ここ(ばばの郷)で、打ち合わせしてね。家の周りにあるものだったり、節のもの、あとやっぱり魚。ご飯も、お米はみんな農家だから、美味しいがね。ただ、最初が肝心なんだよ。米研ぎ。米は一番先に人数分入れなきゃ。ちゃんと研いで、30分置いて、蒸らして、ちゃんとガスで炊いで。

—お弁当に加えて、ばばの郷では、柚子胡椒とかの加工品も作っていますよね？
—柚子胡椒は、レシピと材料があればいいし、大体売り切れるけど、お弁当の方が大変だね。イベントでの売れ具合もあつし。お弁当



と「何も要らないがね。」って言うげつども、毎年ちゃんとおもてなしして。それで、大体どこの地区に誰がいるつつうの把握して。忘れないように。

柴田の人に支えられて、支えて

—そんな中で、ばばの郷が息抜きになったり？
—んだ。みんなでお茶のみもするし、仕事もして。きつい仕事もあつけど。弁当のつくり方も大変だし、売り方も。屋外で販売する時は、皆が座る腰掛けだの荷物さ、トラックで運んだり、力仕事もあるしね。でも、私はそういうの全然苦に無くないの。力仕事でもなんでも、誰かの為にすつごどは、自分の為にもなるんだよ。人の為だけじゃないんだよ。私は自分でそう思ってたから。だから、ほら部落の婦人防火クラブの副会長もやったりど



が。日本全国で初めて入間田が、婦人防火クラブを結成したんだよ。白いエプロン姿で消防団の水かけもしたんだよ。だからね、仕事もきついごどもあつけども、私は自分から与えるだけじゃなく、地域の人だち、みんなに支えられてんだね。ばばの郷も結成した時から、副組合

長だけつども。なんで味付け担当のつや子さんで無くて、私なの？って思ってたごども(笑)

—当初は、ばばの郷のメンバー集めるのも大変だったって聞きました。大変、大変。全員集めるのに1か月くらいかかったね。チラシ作ったりして、アンケートも取ったりしたし、結構大変だったんだよ。あと、やっぱりこういう活動に理解ある人じゃないと、参加しないよね。あと、若い人も入ってこないし。結局、結成の時からメンバーに大して変わりねんだ。私らも年取つてつから、後継どが不安なごどはあるよ。活動出来なくなつたらしゃねな。って思うよ。でも、やれる範囲内でやりましようって声掛けはしてんの。

—そうですね、全部手作りで大変な面もあるし。
—うん、そう。イベント用に、売る加工もの作りね。

—そうですね、全部手作りで大変な面もあるし。
—うん、そう。イベント用に、売る加工もの作りね。

味期限書いたり。あと、おしぼり、箸どが全部ほいな準備すんだ。あとは、ちゃんと領収書と料金を貰つてくるごど。忘れずにね。あと配達専門。

—荒井さんの頭の中に、誰がどこに住んでいるか全部記憶されてるから？
—うん、場所はごども大体わがつてから。あと、この地域の色んなルート頭さ入つてるし、道路に慣れつてつから、弁当も静ずがにもつていくが。あと、これから雪もふつからおつかねんだ。

—口コミでお弁当が人気ですが、これから他にチャレンジしたいものは？
—やっぱり、おにぎり作つてみだいな。おにぎりもさ、美味しいから売れるんだよね。うちらほうで、ちゃんと作つてつから。おかずに入れる具ぐらいと。海苔とで、美味しいよね。やつ

—そうですね、全部手作りで大変な面もあるし。
—うん、そう。イベント用に、売る加工もの作りね。



—あと、一番最初のお弁当も何作ろうか悩んだって。
—そう、最初の頃は悪戦苦闘だよ。一番最初に、仕出し弁当頼まつた時は、春先で。柴田の桜まつりに700円くらいでつて頼まれたんだごど、どういふの出そうが。で、柴田のまちの花が桜だが、黄色は卵で、ピンクは桜



—そうですね、全部手作りで大変な面もあるし。
—うん、そう。イベント用に、売る加工もの作りね。

—そのおにぎりの中でも特に頑張りたいのは？
—やっぱり梅と鮭が。でも、ここで採つて漬けた梅が一番いんだつて。ここで、ちゃんと3日間干してつぐんだ。採るのも大変なんだよ、梅も柚子の木みだいに棘あつから。手袋とか軍手してもだめなんだな。でもま、手袋すればいいよ。素手で採つとね、みんな手の甲傷だらけ、ぐちゃぐちゃになつから。

—最後の質問、ばばの郷として、これから柴田でどういう役割を果たしたいですか
—産直だったり、注文があればお弁当・惣菜出して。柚子がなれば、加工してね。そういうごど、やれううやるね、そういう感覚。あごは、ばばの郷のみんなの息抜きと元気、お弁当の仕出しでね、それで地域がちよつとも元気になればと思ふね。

「てざわり」発行にあたり、私にとって一番貴重な経験だったのは、ばばの郷のお母さんや生産地の皆さんにお茶を飲ませて貰ったり、たわいない話をしたりといった時間でした。「いや、袖子は表作と裏作があるから、今シーズンは沢山取れたんだよね。」だったり、「柚子の木の棘は、すんごいんだよ。なんたってタイヤに穴開けちゃうんだから。」といったような、大学の中でだけ生活していたら知れないようなことを沢山知ることが出来たからです。

ほんの少しばかり柚子について知った私は、遂には全く関係のないテレビ番組で柚子特集が放送されると、「いや、そうなんだよ。柚子の棘って革手袋しなきゃいけないくらい鋭いんだよ。だって、タイヤに穴空くくらいだから!!」といったように生産地側の人間になったつもりで、一体誰に向かってなのか、マウントを取るくらいの気持ちの入れようになっていました。

一方で、振り返って考えると、「てざわり」を発行したかった最初の動機は、どうにかこの魅力的な生産地にもっと興味を持って貰ったり、地域の食文化を自分事として知ってくれるような人を一人でも増やしたいという気持ちがきっかけでした。もし、万に1人「てざわり」を通して柴田町や食べ物が生まれる現場に近い目線で、地域を見つめ直してくれる人が一人でも増えたら、それだけで私としては地域を知って、参加してもらおうきっかけづくりができたことを誇りに思います。

最後に、本誌発行にあたり、「COOPトリプルカードみやぎスマイル基金」の採択を受け、この1年間、地域資源マネジメント研究室のメンバーと活動に取り組んでまいりました。この間、地域の多くの皆様に励ましをいただきました。この場をお借りして御礼申し上げます。写真は、メンバーで「ばばの郷」を訪問したときのもの、スマイル基金最終発表会にての他大学の皆さんとのふれあいの様子です。

